佐々木先生への感謝をこめて

川崎西部地域療育センター
通園課　園長　幸田　栄

先生にお目にかかったのは、1970 年代後半のことでした。先生は、ブリティッシュコロンビア大学から帰られ、秩父学園、東京大学、女子医大、安田生命社会事業団、と活躍の場を広げられていました。そして、1977 年、小児療育相談センターの所長に就任されました。その頃、自閉症のとらえ方は、まだ混とんとした時代で、親の育て方が原因の情緒障害であるという説がまだまかり通っている時代でした。一方で、子どもの特性や発達を無視した、無理なプログラムが子どもの混乱を招いていました。

家族の側に立つ

障害の見方が混とんとしている時代、家族や周囲の人、時には専門家からも、「あなたの育て方のせい」と言われ、自責の念に駆られ混乱し、絶望しているお母さんたちは、決して少なくありませんでした。

先生の診療は、決して単なるなぐさめや様子をみましょうといった結論を先送りするようなものではありませんでした。診断やお子さんの特性、支援方法など伝えるべきことは伝えるというスタンスです。でも、暗い顔で診療室にはいっていくご両親が、出てくるときには晴れ晴れとした表情で出てこられました。たとえ障害があるお子さんにたいしても、敬意をもって接する先生の態度に、保護者の方も自分が尊重されたと感じられるのだと思われます。そして、それぞれの家族にとって大切にする育児のヒントがちりばめられ、やりようがあるのだという自信とエネルギーを与えられたのだと思います。「佐々木先生に救われた」と多くのお母様に声をかけられました。

自閉症は意味理解の障害

自閉症は認知の障害であるということが定説になる以前から、「自閉症は意味理解の障害である」とおっしゃっていました。

1982 年、佐々木先生は何人かの仲間と、ノースカロライナを訪れました。そこで自閉症の認知特性を理解し、支援を行うこと、構造化や視覚支援を取り入れた、医療、教育と福祉のサービスを体験されました。そして、自閉症に共通する方略、ゆりかごから墓場までの年齢や発達に応じたサービス、保護者との協働、ジェネラリストモデルなど、ＴＥＡＣＣＨが大切にしているポリシーに出会いました。自閉症の情報処理に沿った支援を行うこと、人としての生活の視点を大切にすること、保護者との関係など、先生が共感されることが大きかったのだと思われます。そして、ショプラー教授をはじめＴＥＡＣＣＨのスタッフを招いて

学ぶ機会をつくられ、自閉症の特性を配慮した支援が大切であることを、日本全国に広めていかれました。自閉症の支援について、草の根の仲間の存在と大きな流れを作られました。

療育センター構想

横浜市の中でも、福祉のサービスを構築していく事業がすすめられていました。先生は、毎日の診療という個々のケースの対応に心を砕くと同時に、親の会と協働し、行政とともに福祉サービスの構築にも心を砕かれました。療育センターと保健所との連携など先駆的なサービスにも先生のご意志と人脈が生きています。もちろん、幼児期だけでなく、学齢期や成人期への系統的なサービスについて方向性が示され、先生が早くから考えられてきたことが、今少しずつ実現されてきていると感じます。

子どもへのまなざし

「子どもへのまなざし」は、先生が地域の保健師さんや保育士さんとの勉強会の記録をまとめた本の題名です。先生はこまめに小さな勉強会にも出むかれ、子育てに関する支援にも精力を注がれました。先生の子育てに関する姿勢は悩める保護者にも大切な道筋を示されました。一方、ここで学んだ大勢の保育士さんたちが、保育園の中で配慮が必要なお子さんたちを暖かく受け入れ、力をつけていきました。

先生は、子どもへの理解を強調されました。これは、私のその後の療育の指針になりました。ＴＥＡＣＣＨプログラムの最初のトレーニングセミナーに参加させていただき、療育のスキルを学ぶとともに共に学ぶ仲間と言う大きな財産をいただきました。先生とともに、たくさんの研修会や学習会をひらき、理解者を増やしていきました。先生は周りのスタッフにも決して指示的に接することはありませんでしたが、保護者にかかわる姿勢など、常に背中で規範を示してくださっていました。私たちは、佐々木先生から、療育の意味、仕事に向かう価値観などの哲学を学びました。そして、先生の姿勢は、日本全国に共感する仲間を生んでいます。先生の近くで仕事ができたこと、療育の流れを作っていく時代に共に歩めたことをありがたく誇りに思います。先生に感謝をこめて、そして心からのご冥福をお祈り申し上げます。